

ファン心理と心理的健康に関する検討

今井 有里紗*・砂田 純子**・大木 桃代***

A Study of Fanship and Mental Health

Arisa IMAI, Junko SUNADA, Momoyo OHKI

1. 序論

ファンとは清水（1997）によると「スポーツや芸能での熱狂的な愛好者ファナティック（fanatic）の短縮語」と定義されており、ファンである人々に共通して存在する心理がファン心理であるとされる。ファン心理は、小城（2005）により「直接的なコミュニケーションを持たず、主にマス・メディアを介して知り得るタレント・アーティストに魅力を感じる」と定義されている。

ファン心理の研究は、「ユーミン現象」（中村，1994）や「小田和正ファンの心理」（上野・渡辺，1994）、「タカラヅカファン」（上瀬，1994）、「大相撲ブーム」（上瀬・亀山，1994）プロ野球ファンを対象としてファン同士の帰属意識について検討したもの（広沢・井上・岩井，2006）などがある。これらの研究は、特定のファンに対する心理や行動を扱い、ファンがファン対象に求めているものや共感する要素、ファン対象の経歴やマス・メディアにおける取り扱われ方などについて分析を行っており、社会学的、社会心理学的観点から検討されているものが多い。そのため、研究方法においても歌詞の内容やファン対象の著書分析、ファン層と非ファン層における比較検討などケーススタディ的研究に留まっていたように思われる。

しかしながら、ファン心理は特定の対象に対して感じるものに留まらず、誰もが持つ心理であるということから、小城（2002，2004，2005，2006）は、大学生を対象にその構造について、ファン行動やファン対象の職業、ファンとファン対象の性別の組み合わせ、ファン層の分類などに着目した研究を行った。その結果、ファン心理の構造を『作品の評価』『疑似恋愛感情』『外見的魅力』『同一視・類似性』『流行への同調』『ファン・コミュニケーション』『尊敬・憧れ』『流行への反発・嫉妬』の8因子構造とし、その中でも『作品の評価』と『尊敬・憧れ』が中心である

* いまい ありさ 文教大学大学院人間科学研究科
** すなだ じゅんこ 文教大学大学院人間科学研究科
*** おおき ももよ 文教大学人間科学部

とした。また Wann, Melnick, Russell, & Pease (2001) はスポーツチームファンに着目し、ファン心理には、ファン対象のパフォーマンスと、ファンにおける社会的要因と個人的要因が存在することを指摘した。この社会的要因とはファン集団や家族、個人的要因とは自尊心や現実逃避であるとし述べている。

さらに、川上 (2005) は中高生を対象にファン心理の構造と発達課題との関連性について検討した。その結果、ファン心理の構造は『なりたい対象への気持ち』と『恋愛感情様相』の2因子であり、前者は同性の対象に、後者は異性対象に役割を果たしているとした。これらのように、ファン心理一般の構造についての研究は行われているものの、その構造が一貫していない。そのためファン心理の安定した構造の検討が求められている。

また、ファン心理はファンに対してポジティブ・ネガティブの両側面の効果をもつことも指摘されている。ファンにとって、ファン対象が尊敬や憧れの対象であったり、ライフスタイルの模倣、人生の手本としての存在となる点 (小城, 2006) がポジティブな側面として挙げられる。一方、ファン心理が強すぎるとファンの後追い自殺やストーカー行為が起るなど病理的な点 (川上, 2005) がネガティブな側面として挙げられている。

ポジティブな感情の喚起が健康の増進を促すという研究 (Burton & King, 2004) を基に、ファン心理と健康との関連を考えると、ファン対象に対して応援や好意といったポジティブな感情が喚起されることにより、健康の増進を促すことが予測される。ファン心理のポジティブな側面に関する研究として西川・上笹 (2007) は、ファンクラブに所属しているファンを対象に、ファン心理と心理的健康の検討を行った。その結果、コンサートに参加したファン、及びファン仲間と共に参加したファンにおいて、不安・抑うつ傾向の改善が認められた。研究対象が特定のファンであることや、心理的健康への関連性の検討において、GHQ を健康度の指標として用いた点は問題点として挙げられるものの、ファン心理の心理的健康に対するポジティブな効果を示したといえる。

そこで本研究では、ファン心理のポジティブな側面に着目することとする。そしてファン心理一般の構造を明らかにし、さらに生きがい、QOL といった心理的健康におけるポジティブな指標を用いて両者の関連を検討することはファン心理研究の発展において有意義であると言える。また川上 (2005) によると、中学生は現実と非現実の恋愛が混在し、高校生において現実とファン対象への恋愛との区別がされ、青年期以降においてもその傾向が持続する者と、青年期への移行においてファン対象に対してさめる者へと分化することが指摘されている。そこで大学生を対象にすることにより、より一般的なファン心理に近い傾向が捉えられると考えられる。

2. 目的

本研究では、ファン心理におけるポジティブな側面に着目し、ファン心理の構造の検討及びファン心理が心理的健康にもたらす効果について、生きがいや QOL を始めとする心理的健康との関連から検討することを目的とする。

3. 研究 1

3-1. 目的

研究 1 ではファン心理の因子構造の検討及びファン心理尺度の項目の選択を行うことを目的とする。

3-2. 方法

調査期間及び調査対象者：調査は 2009 年 11 月上旬に関東圏の大学生 151 名（男性 53 名，女性 98 名，平均年齢 19.7 歳，SD=1.39）のうち，ファン対象の有無において“ある”と回答した 85 名（男性 27 名，女性 58 名，平均年齢 20.35 歳，SD=2.22）を対象として調査を実施した。

倫理性配慮：調査は匿名で行われることから，通常の同意文書の作成は不可能であり，回答することで調査への同意表明とみなされるものとした。

調査項目：①調査協力者におけるファン対象の有無を尋ねる 1 項目，②ファン心理を具体的に想定してもらうため，ファン対象のジャンル，対象の個人名または団体名を問う自由記述式の 2 項目，③川上（2005），広沢・井上・岩井（2006）を参考に筆者が独自に作成したファン心理尺度 61 項目（“全くあてはまらない”：1～“非常にあてはまる”：5 の 5 件法）の計 64 項目から構成された。

手続き：質問紙は大学の授業時に配布して調査を依頼し，回答終了後その場で回収した。ファン対象の有無の項目で“なし”と回答した者にはその時点で質問を終了した。

結果処理法：回答のうち，ファン心理の有無よりの質問において“ある”と回答されたものを分析の対象とした。統計パッケージ SPSS16.0J を用いて，ファン心理尺度について因子分析および信頼性分析を行った。

3-3. 結果

3-3-1. 尺度項目の検討

ファン心理尺度 61 項目に対して，最尤法，バリマックス回転による探索的因子分析を行った。固有値 1.0 以上を基準として因子数を決定し，16 因子が抽出された。さらに，共通性が 0.40 以下，因子負荷量が 0.40 以下であった 39 項目を削除して再度分析を行い，初期固有値の減衰と因子の解釈可能性から 4 因子解 22 項目を抽出した（累積寄与率 57.25%）。

第 1 因子は「その対象には，なにか自分と同じものを感じる」，「その対象のような生き方をしたい」など 7 項目から構成され，『共感因子』と命名した。第 2 因子は「その対象がいない人生は考えられない」，「その対象がいなくなってしまうたら毎日が物足りなくなる」など 7 項目から構成され，『熱狂因子』と命名した。第 3 因子は，「その対象の作品（歌・演技・プレーなど）が好きである」，「自己紹介する時や会話の中で，××ファンであることによく触れる」など 5 項目から構成され，『応援因子』と命名した。第 4 因子は，「あなたは典型的な××ファンだね。」と言われる」，「自分は典型的な××ファンだと思う」など 3 項目から構成され，『自覚因子』と命名した（表 1）。

3-3-2. 信頼性の検討

尺度の信頼性の検討のため，Cronbach の α 係数を算出したところ，共感因子は $\alpha = .860$ ，熱

表1 ファン尺度因子分析表（最尤法，バリマックス回転）

	共感	熱狂	応援	自覚	共通性
第1因子: 共感因子 ($\alpha=.860$)					
その対象には、なにか自分と同じものを感じる。	.819				.675
その対象のような生き方をしたい。	.737				.628
その対象には、共感できる要素が多い。	.659				.582
その対象は自分の目標としたい人物である。	.656				.487
その対象には、親近感を感じる。	.651				.492
その対象のようになりたい。	.586				.431
その対象の人气が今ほどでなかったら、それほど好きではなかったと思う。	.572				.418
第2因子: 熱狂因子 ($\alpha=.706$)					
その対象のいない人生は考えられない。		.753			.731
その対象がいなくなってしまうたら、毎日が物足りなくなると思う。		.738			.732
自分の予定を犠牲にしても、その対象に関することを優先させたい。		.729			.547
その対象のためなら、たいていのことは我慢できる。		.655			.484
1日1回はその対象のことを考える。		.567			.593
その対象が自分の気持ちを代弁してくれていると思うことがある。		-.551			.543
他の××ファンに親近感を感じる。		.524			.428
第3因子: 応援因子 ($\alpha=.789$)					
その対象の作品(歌・演技・プレーなど)が好きである。			.699		.580
自己紹介するときや会話の中で、××ファンであることによく触れる。			.694		.602
同じ対象を好きな人を見つけるとうれしくなる。			.553		.415
その対象を、どんなことがあっても応援し続けたいと思う。			.536		.530
その対象を尊敬している。			.461		.430
第4因子: 自覚因子 ($\alpha=.884$)					
「あなたは典型的な××ファンだね」といわれる。				.860	.803
自分は典型的な××ファンだと思う。				.814	.820
自分は、他の人から典型的な「××ファン」だと思われている。				.732	.643
	固有値	7.00	3.02	1.47	1.11
	寄与率(%)	31.83	13.71	6.68	5.04
	累積寄与率(%)	31.83	45.54	52.22	57.25

狂因子は $\alpha = .706$ 、応援因子は $\alpha = .789$ 、自覚因子は $\alpha = .884$ となり、いずれの因子も高い内的整合性が得られた。

3-4. 考察

ファン心理尺度の項目選択、因子構造、および信頼性の検討を行った結果、第1因子は「共感因子」、第4因子は「熱狂因子」、第3因子は「応援因子」、第4因子は「自覚因子」の4因子か

ら構成される 22 項目が選択された。

第 1 因子の「共感因子」は、ファン対象に対する共感や、目標としたい対象といった内容の項目で構成された。これは小城（2006）が論じた、ファン対象が、尊敬や憧れの対象、ライフスタイルの模倣、人生の手本としての存在となるという点と一致した。

第 2 因子の「熱狂因子」は「ファン対象のいない人生は考えられない」といったファン対象に対する強い好意を表す項目となった。小城（2004）、川上（2005）において、ファン対象への疑似恋愛感情が挙げられていたが、本研究では恋愛感情に関する項目は因子分析の過程で削除された。このことから、本研究の熱狂因子における感情は恋愛感情とは異なった好意であると考えられる。思春期における現実に近い恋愛感情から青年期への移行において、その感情が疑似であることを理解し、ファン対象に対してさめる者に分化することが指摘されている（川上、2005）ことから、恋愛感情とは性質の異なる、応援感情や好意であると考えられる。

第 3 因子の「応援因子」はファン対象の作品に対する評価や、ファンとして応援していることの表明、同じ対象を応援している人に対する共感などの項目となり、小城（2005）による『作品の評価』や『ファン・コミュニケーション』の項目内容と類似した結果となった。

第 4 因子の「自覚」因子は、自他共に認めるファンであることの自覚を示す項目であった。自身がファンであるということの自覚がファン心理の要素として存在していることが認められ、広沢・井上・岩井（2006）の集団帰属意識と類似していた。

因子構造において、累積寄与率が 57.25%、4 因子の信頼性係数も高い値が得られたことから、本研究で得られた尺度を「ファン心理尺度」として研究 2 において使用することとした。

4. 研究 2

4-1. 目的

ファン心理と心理的健康との関連について、生きがい感、QOL 等健康関連指標を用いて検討することを目的とする。

4-2. 方法

調査期間及び調査対象者：2009 年 11 月下旬から 12 月上旬に関東圏の大学生 128 名（男性 34 名、女性 94 名、平均年齢 19.66 歳、SD=1.13）を対象に調査を行った。

倫理性配慮：調査は匿名で行われることから、通常の同意文書の作成は不可能であり、回答することで調査への同意表明とみなされるものとした。

質問紙は以下の 5 つのパートから構成された。①調査協力者のファン対象の属性、対象の団体名または個人名を問う 2 項目。②ファン心理尺度：研究 1 において作成した 22 項目（“全くあてはまらない”：1～“非常にあてはまる”：5 の 5 件法）。③生きがい感スケール：ファン心理と生きがいとの関連を検討するため、近藤・鎌田（1998）のうち、「存在価値」「意欲」「現状満足感」の因子とされる 25 項目（“いいえ”：1・“どちらでもない”：2・“はい”：3 の 3 件法）。④QOL：ファン心理の QOL への影響を検討するため、大木・山内・織田（1998）、若松・茂原・内山・大木（2007）を参考に作成した QOL 尺度。ファン対象の重要度（「あなたが応援している対象は現在のあなたの幸福にとってどのくらい重要ですか」（全く重要でない：1～非常に重要：6））、ファン対象に対する満足度（「あなたは現在のあなたが応援している対象についてど

のくらい満足していますか」(非常に不満：1～非常に満足：7)), ファン対象に対する将来の重要度(「あなたが応援している対象は将来のあなたの幸福にとってどのくらい重要になりますか」(全く重要でない：1～非常に重要：6))の3項目。⑤ SUBI：主観的健康感を測定するため、日本語版 SUBI (WHO, 2001) を用いて、ファン心理と健康度との関連を検討した。日本語版 SUBI (WHO, 2001) は40項目から構成され、「心の健康度」と「心の疲労度」が測定可能である。本研究では、そのうち子育てに関する項目など調査対象者の属性に適さないと判断した下位尺度「家族との関係」「身体的な不健康感」に含まれる9項目を除いた31項目から構成される計83項目を用いた。

手続き：大学の授業時間内に質問紙を配布して調査を依頼し、回答終了後その場で回収した。

結果処理法：統計パッケージ SPSS16.0J 及び Amos16.0J を用いて分析を行った。ファン心理尺度は因子分析及び信頼性分析を行い、尺度の信頼性を検討後、因子得点を算出した。生きがい感スケールは因子分析及び信頼性分析を行い、尺度の信頼性を検討後、因子得点を算出した。QOL 尺度は大木他(1998)、若松他(2007)と同様に数値化し、ファン対象に対する重要度、満足度、将来における満足度、及び QOL 得点を算出した。SUBI は標準手続きに則り、各下位尺度得点、心の健康度得点を算出した。ファン心理尺度と各健康関連尺度との関連性の検討は、ファン心理尺度と、生きがい感スケール、QOL、SUBI の各々の得点を用いて、重回帰分析を行った。さらに同得点を用いて共分散構造分析を行い、モデル化を行った。

4-3. 結果

4-3-1. ファン心理尺度

ファン心理尺度 22 項目について、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。固有値 1.0 以上を基準として因子数を決定したところ、4 因子が抽出された。さらに共通性が 0.40 以下、因子負荷量が 0.40 以下であった 6 項目を削除して再度分析を行い、初期固有値の減衰と因子の解釈可能性から 3 因子解 16 項目とした(累積寄与率 61.54%)。

第 1 因子は「その対象がいない人生は考えられない」、「自分は典型的な××ファンだと思う」など 9 項目から構成され、『熱狂因子』と命名した。第 2 因子は「その対象は自分の目標とした人物である」、「その対象のようになりたい」など 4 項目から構成され、『目標因子』と命名した。第 3 因子は、「その対象には、共感できる要素が多い」、「その対象には、親近感を感じる」など 3 項目から構成され、『共感因子』と命名した。

信頼性の検討の結果、第 1 因子は $\alpha = .921$ 、第 2 因子は $\alpha = .854$ 、第 3 因子は $\alpha = .812$ であり、全ての因子において高い内的整合性が得られた(表 2)。

調査対象者の男女比が 1:3 であったこと、小城(2002, 2004, 2005, 2006)、川上(2005)において構造に性差が存在することが指摘されているため、各項目において、男女間で平均値の t 検定を行った。その結果、「その対象を尊敬している」と「その対象には共感できる要素が多い」の 2 項目においてのみ、有意傾向の性差が見られ、女性の方が高い傾向であった($t(128) = -1.73, p < .1$; $t(128) = -1.77, p < .1$) (表 3)。しかし、有意傾向の差であったこと、16 項目のうち 2 項目であったことから、ファン心理の構造にはほぼ性差はないものとして、今後の分析を行うこととした。

表2 ファン心理尺度（最尤法、プロマックス回転）

	共感	目標	共感	共通性
第1因子: 熱狂因子($\alpha = .921$)				
その対象のいない人生は考えられない。	.902			.784
自分は典型的な××ファンだと思う。	.891			.762
「あなたは典型的な××ファンだね」といわれる。	.818			.645
1日1回はその対象のことを考える。	.746			.467
自分は、他の人から典型的な「××ファン」だと思われている。	.741			.638
自分の予定を犠牲にしても、その対象に関することを優先させたい。	.739			.533
その対象がいなくなってしまうたら、毎日が物足りなくなると思う。	.717			.557
その対象のためなら、たいていのことは我慢できる。	.691			.578
その対象を、どんなことがあっても応援し続けたいと思う。	.537			.518
第2因子: 目標因子($\alpha = .854$)				
その対象は自分の目標としたい人物である。		.958		.518
その対象のようになりたい。		.800		.544
その対象のような生き方をしたい。		.673		.625
その対象を尊敬している。		.544		.537
第3因子: 共感因子($\alpha = .812$)				
その対象には、共感できる要素が多い。			1.009	.876
その対象には、親近感を感じる。			.649	.472
その対象には、なにか自分と同じものを感じる。			.545	.485
	固有値	7.42	1.40	1.03
	因子寄与率(%)	46.40	8.73	6.41
	累積寄与率(%)	46.40	55.12	61.54
	因子間相関			
	因子1			
	因子2	.555		
	因子3	.582	.549	

4-3-2. 生きがい感スケール

生きがい感スケール 25 項目について、最尤法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。固有値 1.0 以上を基準として因子数を決定したところ、6 因子が抽出された。共通性が 0.25 以下、因子負荷量が 0.40 未満であった 8 項目を削除し、再度分析を行い、初期固有値の減衰と因子の解釈可能性から、3 因子解 17 項目とした（累積寄与率 48.14%）。第 1 因子は、「私は周囲から認めて貰っています」、「自分は高く評価されたと思えることがよくあります」など 7 項目で構成され、『存在価値因子』と命名した。第 2 因子は、「私は将来に希望を持っています」、「自分の人生に大きな期待を持っています」など 6 項目で構成され、『意欲因子』と命名した。第

表3 ファン心理尺度の平均値・SDとt検定結果

	全体 (n=128)		男性 (n=34)		女性 (n=94)		t値	有意差
	平均	SD	平均	SD	平均	SD		
その対象を尊敬している。	4.00	1.05	3.74	1.16	4.10	1.00	-1.73	† 男性<女性
その対象を、どんなことがあっても応援し続けたいと思う。	3.54	1.28	3.35	1.43	3.61	1.22	-0.99	
その対象には、共感できる要素が多い。	3.48	1.20	3.18	1.17	3.60	1.19	-1.77	† 男性<女性
その対象がいなくなってしまうたら、毎日が物足りなくなると思う。	3.40	1.31	3.15	1.42	3.49	1.26	-1.31	
その対象は自分の目標としたい人物である。	3.23	1.37	3.03	1.64	3.30	1.26	-0.98	
その対象のようになりたい。	3.16	1.34	3.26	1.46	3.13	1.31	0.51	
その対象には、親近感を感じる。	3.15	1.16	3.03	1.17	3.19	1.17	-0.69	
1日1回はその対象のことを考える。	3.07	1.43	3.00	1.61	3.10	1.36	-0.33	
その対象のような生き方をしたい。	3.02	1.23	2.76	1.35	3.12	1.17	-1.44	
その対象のいない人生は考えられない。	2.95	1.39	2.29	1.47	2.52	1.44	-0.74	
自分は典型的な××ファンだと思う。	2.88	1.36	2.74	1.44	2.93	1.34	-0.70	
その対象のためなら、たいていのことは我慢できる。	2.67	1.24	2.56	1.40	2.71	1.18	-0.62	
自分の予定を犠牲にしても、その対象に関することを優先させたい。	2.62	1.32	2.65	1.47	2.61	1.26	0.15	
その対象には、なにか自分と同じものを感じる。	2.53	1.20	2.44	1.35	2.56	1.15	-0.51	
「あなたは典型的な××ファンだね」といわれる。	2.46	1.45	2.29	1.47	2.52	1.44	-0.78	
自分は、他の人から典型的な「××ファン」だと思われる。	2.45	1.37	2.29	1.31	2.50	1.39	-0.75	

†:p<.1

3因子は「私はこの生活に満足感があります」、「私は今幸せを感じています」など4項目で構成され、『現状満足感』と命名された。近藤・鎌田(1998)の項目と比較すると、項目数は減少したが、因子構造はほぼ同様となった。(表4)

尺度の信頼性の検討のため、Cronbachの α 係数を算出したところ、価値存在因子は $\alpha=.832$ 、意欲因子は $\alpha=.832$ 、現状満足感因子は $\alpha=.843$ となり全ての因子において高い内的整合性が得られた。

4-3-3. QOL

ファン対象に対する重要度、満足度、将来への重要度、及び、重要度と満足度をかけあわせた重みづけ得点を算出し、QOL得点を算出した。(表5)

4-3-4. SUBI

標準手続きに則り、各下位尺度得点、心の健康度得点を算出した。各下位尺度の平均点は「人

表 4 生きがい感スケール因子分析表（最尤法，プロマックス回転）

	存在価値	意欲	現状満足感	共通性
第1因子: 存在価値				
私は周囲から認めて貰っています	.861			.582
自分は高く評価されたと思えることがよくあります	.719			.459
私は他人から信頼され頼りにされています	.669			.482
自分が必要とされ存在価値を感じるがあります	.624			.504
私は課せられた役割をよく果たしています	.617			.299
人の為に役に立ったと感ずることがあります	.596			.427
私は人間的に成長したと感ずることがあります	.407			.324
第2因子: 意欲				
私は将来に希望を持っています		.749		.605
自分の人生に大きな期待を持っています		.737		.566
私は物事にやる気を持っています		.687		.600
私には目的があり、達成したいことがあります		.680		.298
皆で力を合わせ目的を達成することがよくあります		.581		.382
私の行為で人に喜んで貰えることがよくあります		.500		.491
第3因子: 現状満足感				
私はこの生活に満足感があります			.928	.775
私は今幸せを感じています			.749	.547
私の毎日は充実していると思います			.733	.600
毎日が平和で楽しいと感じています			.526	.430
固有値	6.411	1.102	1.152	
寄与率(%)	35.619	6.125	6.400	
累積寄与率(%)	35.619	41.744	48.143	
因子間相関				
	因子1			
	因子2	.617		
	因子3	.594	.561	

生に対する前向きな気持ち」6.10 (SD=1.41), 「達成感」3.57 (SD=0.94), 「精神的なコントロール感」11.89 (SD=2.92), 「近親者の支え」6.79 (SD=1.56), 「社会的な支え」6.82 (SD=1.73), 「至福感」5.08 (SD=1.14), 「人生に対する失望感」6.484 (SD=1.30), 「自信」5.1 (SD=1.4), 「社会的つながりの不足」5.82 (SD=1.29), 「心の健康度」28.39 (SD=4.699) となった。

4-3-5. ファン心理と心理的健康との関連性

ファン心理と心理的健康に関する指標との関連性を検討するため、共分散構造分析を行った。有意な影響が見られなかったパスを削除しながら分析を行った結果、最終モデルでは、目標因子と共感因子から熱狂因子に正の影響が認められた ($\beta = .35, p < .01$; $\beta = .41, p < .01$)。また、熱狂因子から幸福への重要度と将来への幸福への重要度に正の影響を示した ($\beta = .73, p < .01$; $\beta = .35, p < .01$)。幸福への重要度から QOL に正の影響を示した ($\beta = .74, p < .01$)。モデルの適合度指標を算出したところ、GFI = .989, AGFI = .971, CFI = 1.000, RMSEA = .000 の高い適合度が得られた。

採用されたモデルから、ファン対象が目標とすることと共感することが熱狂的なファンとなることに強い影響を及ぼしており、熱狂的なファンであればあるほど、ファン対象の重要度が増加し、QOL に強く影響することが示された。

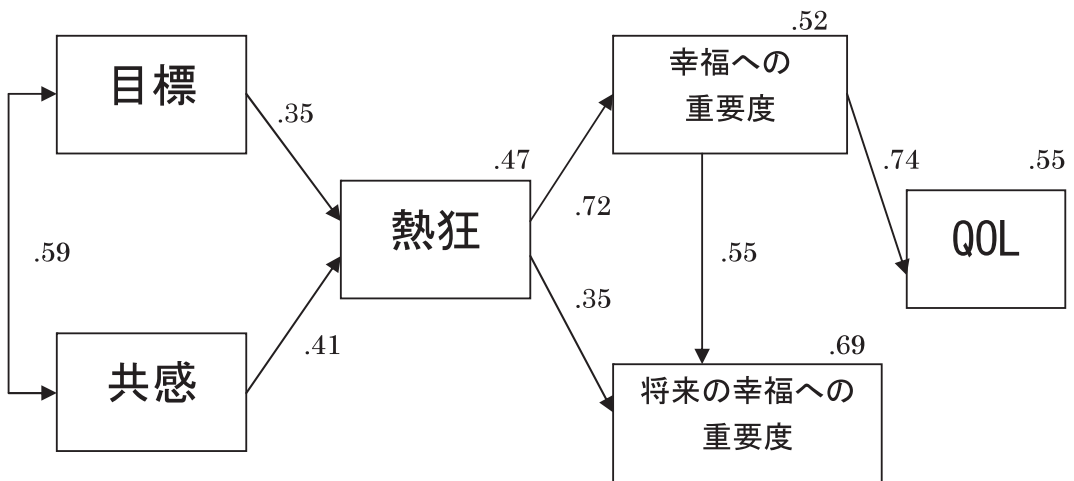


図1 ファン心理と QOL との関連性

4-4. 考察

本研究の目的はファン心理におけるポジティブな側面に着目し、ファン心理の構造の検討及びファン心理が心理的健康にもたらす効果について、生きがいや QOL を始めとする心理的健康の指標との関連から検討していくことであった。

第一に、因子分析の結果、ファン心理は“熱狂”、“目標”、“共感”の3因子から構成されることが明らかになった。

第1因子の熱狂因子は、ファン対象に対する熱狂的な好意や応援の感情、またファンであることの自覚に関する項目が選択された。ファン対象に対する強い好意感情は、ファンの生活におけるファン対象の重要性が示されていると言える。また、ファンであることの自覚については、ファンにおける社会的要因であるファン集団に対する帰属意識と個人的要因の自尊心に関連している (Wann et al., 2001) と考えられる。ファンという一つの集団に属していることが、ファン対象を応援する役割を認識することとなり、役割を得ることが自尊心につながると考えられる。

第2因子の目標因子はファン対象への尊敬、目標としたいといった項目が選択された。これは

研究1における指摘と同様、小城（2006）のファン対象が、尊敬や憧れの対象、ライフスタイルの模倣、人生の手本としての存在となるという点と一致していると言える。

第3因子の共感因子はファン対象への共感や親近感に関する項目が選択された。これは、第2因子で見られた尊敬や目標といった、上位の存在としてのファン対象と異なり、ファンが自身と近い、あるいは似ているといった感情を持つことを示している。これは小城（2006）における『同一視・類似性』と一致すると考えられる。

また、研究2の因子構造は3因子となり、研究1の因子構造と異なった。この理由として、調査対象及び分析方法の違いの2点が挙げられる。

1つ目の調査対象の違いについて、研究1では、質問項目のファン対象の有無に対して“ある”と回答した者のみを対象とした。その結果、ファンであることをより強く感じている者におけるファン心理の因子構造として「自覚因子」が独立して示されたと考えられる。一方、研究2では、ファン対象の有無を問わず、広い範囲のファン心理を測定した。そのため、熱狂的な強いファン心理のみならず、その対象に関心があるといった程度の、弱いファン心理のデータも含まれたことにより因子構造が変化したと考えられる。

2つ目の分析方法の違いについては、研究1では、項目の選択を目的としたため、因子分析において因子間相関を仮定しない直交回転を使用したのが、研究2においては、関連性の検討を目的としたため、因子間相関を仮定した斜交回転を用いた。この点も因子構造が異なった理由として考えられる。

第二に、小城（2004）、川上（2005）はファン心理の性差について指摘したが、本研究では、「その対象を尊敬している」と「その対象には共感できる要素が多い」の2項目にのみ、有意傾向の差が見られたものの、ほぼ性差は見られなかった。その理由として、本研究のファン心理尺度では、恋愛感情に関する項目は選択されなかったことが考えられる。また、質問項目の構成として、性差の見られないことは構成概念がより明確に測定可能であると考えられ、本研究のファン心理尺度はより包括的な概念の把握が可能であると言える。

第三に、ファン心理においては、一般的にファン心理が強いことによるファンの後追い自殺やストーカー行為などの病的な点（川上、2005）など、ネガティブな側面に着目されることが多いが、本研究ではポジティブな側面に着目し、心理的健康の指標として生きがい、QOL、SUBIの各得点を用いて、その関連性について共分散構造分析により検討を行った。その結果、ファン対象に対する共感と目標や尊敬が熱狂的なファン心理を生み出すという構造であることが示され、さらに熱狂因子からQOLに対する強い影響が認められ、モデルとしても高い適合度が得られた。このことからファン心理が、ファン自身の幸福、QOLに大きく影響することが示され、ファン心理のポジティブな側面についてモデル化されたことは大きな成果であるといえる。本研究の結果やポジティブな感情の喚起が健康の増進を促すという報告があり（Burton & King, 2004）、ファン対象に対して尊敬や憧れ、好意といったポジティブな感情が喚起されることにより、QOLの上昇、健康の増進を促すことが期待できると言える。また、西川・上笹（2007）は、ファンの応援行動のレジヤーとしての側面を挙げている、Roger & Douglas（1997 速水訳 2004）は、レジヤーがライフスタイルの重要な構成要素であり、QOLに大きな影響を与えることを指摘しており、本研究の結果もこれを支持している。すなわちファン対象を応援することが、レジヤーつまり、趣味や遊びとしての役割を果たしていると考えられる。反対に言うとも、ファン心理が趣味や遊びの範囲以上に強くなった場合には、ネガティブに働く可能性も否定できない。

また、本研究では、ファン心理について大学生を対象として検討を行った。しかしながら、20代後半以上の社会人や、中高年層のファン心理においても、演歌歌手や韓流スターに対する「追っかけ」などの熱狂行動をとるファンの存在が指摘されている（林，2005）。したがって、今後の課題として、さらに多様な年齢層に対する調査を実施し、あらゆる年齢への適応可能性の検討が求められる。

5. 結論

本研究の目的は、ファン心理におけるポジティブな側面に着目し、ファン心理の構造の検討及びその要因と心理的健康にもたらす効果について、生きがいやQOLを始めとする心理的健康の指標との関連から検討することであった。その結果、ファン心理は熱狂因子、目標因子、共感因子の3因子から構成された。また、ファン心理は、ファン対象の幸福への重要度、QOLに影響することが示された。

6. 引用文献

- Burton, C.M., & King, L.A (2004). The health benefits of writing about intensely positive experiences. *Journal of Research in Personality*, **38**, 150-163.
- 林 (2005). 「冬ソナ」にハマった私たち—純愛、涙、マスコミ…そして韓国 文藝春秋
- 広沢俊宗・井上義和・岩井洋 (2006). プロ野球ファンに関する研究 (V) —ファン心理、応援行動、および集団所属意識の構造— 関西国際大学地域研究所研究叢書 pp29-40.
- 上瀬由美子 (1994). タカラヅカファン 松井豊 (編) ファンとブームの社会心理学 サイエンス社 pp53-70.
- 上瀬由美子・亀山尚子 (1994). 大相撲ブーム 松井豊 (編) ファンとブームの社会心理学 サイエンス社 pp73-90.
- 川上桜子 (2005). ファン心理の構造—思春期・青年期の発達課題との関連から— 東京女子大学心理学紀要 **1**, pp43-55.
- 小城英子 (2002). ファン心理の探索的研究 関西大学大学院『人間科学』社会学・心理学研究, **57**, 41-59.
- 小城英子 (2004). ファン心理の構造 (1) ファン心理とファン行動の分類 関西大学大学院『人間科学』社会学・心理学研究, **61**, 191-205.
- 小城英子 (2005). ファン心理の構造 (2) ファン対象職業によるファン心理・ファン行動の比較 関西大学大学院人間科学 **62**, 139-151.
- 小城英子 (2006). ファン心理の構造 (3) 性別によるファン心理・ファン行動の比較と、ファン層の分類 関西大学大学院『人間科学』, **64**, 177-195.
- 近藤勉・鎌田次郎 (1998). 現代大学生の生きがい感とスケール作成 健康心理学研究 **11**, 73-82.
- 中村紀子 (1994). ユーミン現象 松井豊 (編) ファンとブームの心理学 サイエンス社 pp15-32.
- 西川千登世・上笹恒 (2007). 音楽ファンのコンサート参加行動における精神健康度への影響—吉川晃司ファンを対象として— 目白大学修士論文
- 大木桃代・山内真佐子・織田正美 (1998). 日常生活におけるQOL (Quality of Life) に影響を及ぼす要因の検討 早稲田心理学年報 **30**, (2) pp79-90.
- Roger, C.M & Douglas, A.K. 1997 *A Social Psychology of Leisure* Venture Pub.
- (ロジャー, C. M. ・ダグラス, A. K. 速水敏彦 (監訳) (1998). レジャーの社会心理学 世界思想社)

- 清水 均 (1997). 現代用語の基礎知識 自由国民社
- 上野行良・渡辺麻子 (1994). 小田和正ファンの心理 松井豊 (編) ファンとブームの社会心理学 サイエンス社 pp35-50.
- 若松拓也・内山聡・茂原直樹・大木桃代 (2007). 大学生の QOL に関連する要因の検討 (1) 文教大学生生活科学研究 29, pp189-202.
- Wann, D.L., Melnick, M.J., Russell, G.W., & Pease, D.G. (2001). *Sport fans: The psychology and social impact of spectators*. New York: Routledge.